

持 変

太公望曰く、兵勝の術は密かに敵人の機を察し、速やかに其の利に乗じ、復た疾く其の不意を撃て。云々（『六韜』兵道第十二の文）その不意の利に乗じる方法は、全てが十四の変（状態が変化すること）で詳しく明らかにされているけれども、これらは皆、文字や言葉などによらず、直接的に指し示される利であるから、私もまたこれを研究してもう一つの利に乗じる方法を得たところであり、これを子孫に伝えるものである。敵の人員が新たに集まってくる状態、これを名づけて「未募（みせん）の変」という。我がもしもこのような変化を発見した時は、必ず前に衝陣（敵の動きを束縛する陣）を張って弓を左右に配置し、新たに集まってくる（味方の）者を鈎変の余奇（次の変化に応ずる予備隊）として、言語を発して騒ぐことを禁じる。これは機を集めて勢を集めずというもので、その変化に間隙が生じる（変化を見逃してしまう）のを防ぐためのものである。地形を得られない状態、これを名づけて「未済の変」と云う。私の軍勢がもしもこのような状況に陥ったならば、四武の養陣を稠密に（隙間なく）張って敵の人馬の行列を誘致導入し、奇襲するため道に鳥雲の兵を設けて、敵を待ち伏せするのである。これは軍勢を備えて地形を備えずということであり、その敗走を防ぐ所以である。

人や馬が未だ食事をしていない状態、軍勢が疲労している状態にあるならば、これを「脱虚の変」という。我が軍勢の中にこのような変化を見たならば、急いで乾燥糧食を与えて魚伏の陣を造れ。天の時に順応していない状態、これを名づけて「失徳の変」という。我がもしもこの変化を発見したならば、変化に次ぐ変化をよく推察し、蟄竜の心（待ち遠しく、あせる気持ち）を禁ぜよ。部隊が奔走している状態、将軍が士卒から離れていくような状態にあるならば、これを「半馳の変」という。我が軍勢がこれを発見したならば、半ば鳥雲（集合離散を自在にする）の心によって備の備無の性（我が備えて、敵が備えていない状態を作為すること）を用いる。幅の広い河を渉る状態、渉り終えてすぐの状態、これを名づけて「未調の変」という。我が軍勢が

この状態にあるならば、縁曲の陣、或いは長蛇の格（形式）を備えよ。あわただしくて暇がない状態や警戒心が薄れている状態であれば、これを「失張」と名づける。我がこの変化を発見したならば、九曜の陣、或いは八陣を用いる。陰阻を通過する状態、これを名付けて「回変」という。回変では専ら戦機（チャンス）の争奪戦となり、彼我互いにその変化を窺うものである。もしも我が軍勢がこの変化（状態）に逼迫しているならば、両奇の陣を張って弓を表に出し、陽のあたる高台を占拠し、そこに怒鷹の陣を設けよ。こうして控えの軍を所々に配置することにより味方の敗軍を救援するのである。行軍が乱れている状態、これを「張変」と名づける。我が軍勢の中にこのような変化を見たならば、用捨縦横に陣を作って伏竜に備えよ。恐怖心を抱いている状態、これを名付けて「内虚の変」という。我が軍勢の中にもこのような変化がある時は、断陣を張って回霜の勢をなせ（意味不明）。人に剛臆は無く、機に進退があると云うが、ほぼこのように心得て、変化があれば、それも又変化すべきものであることを知る時は、変化という変化は皆我々の手中にある。神変自在にして不測の利を制する、これを安行聖将という。そうであれば、予期する変化に応じることと、予期せざる変化に応じることがあるが、これが定変・変常の理というものであるならば、聖人でなくしてはありとあらゆる変化に合わせて判断し、行動するようなことはほとんど有りえない。

たとえ変化を見てもその変化の中に止まることがあってはならない。これは変化を知ってその変化に（どう対応すべきかと）苦しむ事があるからだ。必変の変（必然的に生じる変化）には必ず断る。断変の変というのは、不変を変とするからである。変々の順応しない状態がある。敵の不順、味方の不順、その不順を知るのは不変の変である。変にはつかんではならない状態がある。しかも、つかまずにつかんでおく状態、つかんではならない状態、これを知るのがすなわち変である。敵の変化を窺う一方で我が変化も窺われていることがある。ともに変端の間に不変の変がある。変間には変を以て変を為すことがある。これは未変に変があるということで、その変は窮まり無いものがある。